

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530770

研究課題名(和文)

バカロレアに学ぶ伝統継承と市民の育成ー通過儀礼としてのフランス大学入学資格試験ー

研究課題名(英文)

Passing Down Tradition and Nurturing Civic Nature: The Baccalauréat, French University Entrance Exam, as a Rite of Passage

研究代表者：渡邊 雅子 (MASAKO EMA WATANABE)

名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授

研究者番号：20312209

研究成果の概要(和文)：

バカロレアは中等教育の修了認定と大学入学の資格試験を兼ね、4時間の大論述問題で合否が判定される。高校では弁証法で書き・語る訓練を通してフランスの思考とその表現法を学び、哲学や文学の古典の引用を通して共通財産としての教養を習得する。論述では自ら論点を作り出す批判力と統合力が養われ、入試を通して伝統の継承と市民性の育成という2つの異なる目的が達成されている。主に初等教育で規範的に行われる「社会化」は、フランスでは後期中等教育で書き方の様式習得を通して理知的に行われるのである。

研究成果の概要(英文)：

The baccalauréat exam performs double duty: It certifies the completion of secondary school and serves as a university entrance exam. A major essay question, to be answered within four hours, determines whether a student passes or fails. In *collèges* and *lycées*, students learn how to express French thoughts by writing dialectic arguments and practicing oral arguments. They learn to cultivate French thoughts as intellectual heritage by citing philosophical and literary classics. By nurturing the critical and integrative skills needed for developing one's argument, students achieve two objectives via the university examination: nurturing their inheritance of tradition and developing their civic nature. "Socialization," which is primarily carried out within the boundaries of elementary education, is carried out intellectually in France through practice written exams during the latter stage of the country's secondary education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：思考表現スタイル、フランス、大学入試、能力観、哲学教育、市民教育、高大接続、伝統文化

1. 研究開始当初の背景

教育をめぐる言説は1980年代を境に大きな転換を見せた。グローバル化の進捗とともに教育の分野にも経済原理が浸透し、国境を超えた経済競争を勝ち抜くための新たな能力観の提言は、カリキュラムの再編成

を世界的な規模で促している(Pinar 2003)。その一元化傾向は、各国の伝統的カリキュラムや教授法に体现される知のあり方や学校文化との間に緊張を生んでいる(Halsey 1997)。このような時代の趨勢下で、意識的にグローバル化と一線を画し、独自のスタン

スを保っているのがフランスの教育である。フランスの言葉、その中でもとりわけ文法を中心とした伝統的カリキュラムとその教授法の保持はヨーロッパ圏内でも異彩を放っているが、哲学の論文を核にしたバカロレアと呼ばれる大学入試資格試験は、その起源を中世の大学に持ち、制度上の改変はあったものの、その内容は19世紀半ばの施行以来ほとんど姿を変えていない。バカロレアは中等教育の終了認定証であると同時に大学入学や各種国家試験への出願が認められる資格試験でもあり、文字通り少年期から大人への「通過儀礼」と受けとめられている。当研究者は、フランスリヨン市での7年間の小学校調査を通じて、フランスの思考法とその表現スタイルがいかに教育を通じて育まれるかを明らかにしてきた。具体的にはフランスの子どもたちが絵(4コマ漫画)を見てどのように説明や理由付けを行うか作文実験を行い、日米との比較からフランスの思考法の特徴を抽出しつつ、そのような思考表現法がいかに教育によって育まれるかを、フランス語を中心とした言語教育と歴史、市民教育の授業観察を行って明らかにしてきた。さらに現在のフランスの初等教育に見られる伝統的教授法とカリキュラムの起源と変遷を明らかにするため文献調査を行ってきた。しかしながら日米とは大きく異なる「発達段階に応じた」フランスの教育制度と教授法に触れ、初等教育では全く触れることの出来なかった後期中等教育、特に公教育の仕上げとしてのバカロレア準備学習に焦点を当てた研究を行わなければフランスの公教育の全体像は掴めないと感じるようになった。

2. 研究の目的

初等教育で培った研究法を踏襲しつつ、バカロレア準備教育を、技術と価値教育の両面から調査分析を行うことが本研究の目的である。その際にアメリカ型デモクラシーとは一線を画すフランスの「共和国モデル」がいかに教育実践を通じて生徒を社会化していくかを明らかにする。これら2つのモデルの違いは教育のあり方を考える上でも有効な枠組みとなる。すなわち、労働市場に見合った生産者を養成する場としての社会に開かれた「アラカルトな学校」と、自律した市民を養成するために固有の規則を持つ閉ざされた場としての学校という異なる目的とその達成法である。権威主義的に行われる初等教育とは一転し、フランスの高校では「抵抗すること(régistance)」を習うと言われるが、高校生のデモの権利を法律で認めているのもフランスだけである。

近年「論理的思考」や「批判的思考」育成の必要性が喧伝されているが、そのモデルとなっているのはアメリカ型のディベートや

効率的思考法である。何を持って論理的と言うのか、批判的であるとはどういうことなのか、フランスはアメリカモデル以外の豊かな選択肢を与えてくれる。しかしながら、その教育の体系的な実態調査は少なく、またフランス人による自国の教育分析はフランス人自身も認めるように「アメリカ批判に鋭く、フランスに甘い」理念的なものが多い。長年日米の比較調査研究に取り組んだ当研究者は、これらの欠損点を補えると考え。リヨン市で培った教師や教育視察官との信頼関係を保持しつつ中等教育の仕上げとしていかなる訓練が実際に行われ、そこからいかなる社会化が行われるのかを明らかにし、米国モデルにも日本モデルにもない新たな教育理念と実践の選択肢を提供したい。さらに、日本の入試の形態と入試のための「受験勉強」へ、何らかの提言を行えることを念頭に置きながら、フランスの教育の最良の部分と言われる「バカロレア準備級」の研究を行いたい。

3. 研究の方法

本研究は、フランスのバカロレア(大学入試資格試験)準備教育の実態と成果を明らかにし、書く・語る様式の習得を通じていかなる思考表現のスタイルと価値観が養われるか、すなわちフランス人としての社会化が行われるのかを分析する。その分析は、以下の3項目から成る。

1) 授業観察と教科書分析(普通バカロレア)

哲学論文試験に体现される伝統的教授内容と方法はいかに保持されているか、手紙から論文までフランスの書き方の基本様式として学ばれる弁証法(synthèse)の思考構造の特徴とは何か、また文学のテキスト分析や注釈法(explication de text, commentaire)、要旨(résumé)のまとめ方などフランス独特の様式はいかに学ばれそれら表現様式を通じていかなる思考法がはぐくまれるかを学校の授業分析とバカロレア準備の教科書分析(日本の受験教科書『傾向と対策』にあたるもの)を中心に行う。授業ではいかに書くか、論文の構造や語彙などが教えられるが、教科書では模範解答が示されることにより、規範が示される。バカロレアの数ヶ月前から書店の一角は色とりどりの受験教科書で埋め尽くされるが、代表的なものを選び、書き方、答え方の規範と、評価法の基準を探る。また、併せて試験に関連するフランス語・歴史・哲学の授業観察も行う。フランス語では、テキスト分析や注釈法、詩の解釈法を中心に観察する。

(2) 教授法とカリキュラムの文献調査

これら教育現場で観察された伝統的教授法やカリキュラムはいつどのように生まれ、保持されてきたのか、教育史と思想史を中心

とした文献調査から観察結果を補足する。初等教育で行った文献調査を補完し、公教育の全体像を描く努力を重ねたい。

(3) 「通過儀礼」としてのバカロレアメディア・公的空間の機能と国民儀礼の調査

授業分析に加え、バカロレアがいかに社会的に受容され、儀式的色合いを帯びているかを、教師や生徒へのインタビューと新聞、テレビの報道番組を通じて行う。バカロレアの季節になると準備授業や生徒の様子が連日報道され、さらに試験当日の夜には全国ネットのニュースで、哲学の問題が紹介されているのを予備調査で観察した。

4. 研究成果

3年間の調査期間中、フランスのリヨン市とパリ郊外のサンジェルマン・アン・レーのリセにて5回の授業観察とインタビューを行い、最終年には国際バカロレア（日本語オプション）口述試験の視学官を務め、リヨンとサンジェルマンのリセで、フランスの教育の特徴とバカロレアの占める役割についてコンフェレンスで基調講演を行った。国際バカロレアに携わるリセの教員の要請に応じてバカロレアの理念と訓練法を伝える勉強会を3回実施したことも、社会貢献としての研究成果である。また、フランス全土で行われるバカロレア模擬試験（Bac Blanc）の口述試験の様子も観察しビデオ撮影を許された。論文と口述試験で測られる技術・能力の違いと口述試験の具体的な評価法とダイナミズムを実感できたのは大きな収穫であった。

以下に調査の知見を記す。

1) 普通バカロレア試験の内容と評価制度、訓練法の概要（2008年の調査結果から）：普通バカロレアの試験は論述と口答試験で行われ、論述は、すべての教科を通じてセンターズと呼ばれる弁証法で書くことが期待されていること、よって準備教育は、与えられたテーマで実際に書きながら、教師による個々の学生の論文添削が中心になることが明らかになった。評価方法は、教科によって若干の違いはあるものの、基本的に構成（plan）、知識（connaissances）、内容（document）、結論（conclusion）、綴り字・文法（orthographe）の5項目で合計20点満点で評価される。その中でも論理展開を表現し、かつ弁証法の構造で書かれているかを確認できる「構成」が大きな比重を占めることがわかった。フランスでは弁証法の習得（その思考法と表現法）が、高等教育へ進めるか否かの鍵になることが確認出来た。論述試験でも、項目の明確さと何より弁証法の「型」があることにより採点者によるぶれは極力抑えられる。フランス語教師によれば、この他、文学（フランス語）の試験においてはテ

キスト解釈（explication de text）とコメント（commentaire）の書き方があり、こちらもフランス独特の思考と表現法を示しているが、基本は弁証法であり前者2つはその応用と考えられている。

バカロレアで最も重要視される哲学の論文では、弁証法を基本としながらも、「問い」を立て、その答えを多面的に検証する問題提起（problématique）を個々の学生が作ることが求められる。さらにいかに良い考えがあっても、それをバックアップする古典や著名な作家の引用の暗記が出来ていなければ論文は書けない。バカロレアでは「過去」の材料を使いつつ、独自の論理展開を行う能力が測られるのである。

2) Bac Blanc（バカロレア口述模擬試験）に見る口述試験の内容・評価制度・訓練法（2009年の調査より）：パリ郊外のリセにてフランス全土で行われるバカロレア模擬試験（Bac Blanc）のフランス語（文学）の口述試験を観察し、併せて論文試験の準備と試験後の添削の授業、地理・歴史、哲学など多くの授業観察と教員のインタビューを行い、バカロレア準備教育の全体像を具体的に把握することが出来た。文学の口述試験は、予想に反してかなり定型化しており、作品が書かれた時代の文学運動や思潮、社会状況と関連させ、その時代の「代表的一例」として、提示された作品（抜粋）を分析することが求められている（ここでいう分析とはキーワードになる専門用語を定義したうえで、それらを使って解釈・説明することを指す）。作品そのものを味わったり、読解することは期待されておらず、日本の文学鑑賞とは全く観点が異なる。また詳細な評価表が生徒にも示され評価の観点が教師と生徒で共有されているので、口述・論文ともに文学の試験といえども客観的な評価が可能なおとも実感出来た。

3) フランス式論文の書き方の訓練法と高等教育との関連：バカロレアの神髄とも言えるフランス式論文の書き方を教える授業では、かつては教師の示すモデルから一握りのよく出来る生徒が「感覚的」に学んだ構造や弁証法を、ワークシートや練習問題、討論などから具体化、視覚化して丁寧に教えていることも明らかになった。哲学についても同様で、質問を変えながら抽象的概念の様々な側面に光を当てる高度な授業が行われつつも、教師が最後に論点をまとめる試験対策的な教授法が取られていた。しかしいずれの場合も、バカロレアを通して中等教育のプログラム全体が、高等教育の基礎をつくる構造になっており、高等教育と断絶する形で入試が行われる日本とは対照的である。

バカロレアにおける国語（フランス語＝文

学鑑賞)と地理・歴史、哲学は、フランス国民としての知識・教養を共有させつつ、弁証法で書く、話す技術を身につけさせることでそれら知識の表現法をも形成する。その意味においてもバカロレアが果たす文化継承の機能・役割は大きいと結論付けられる(哲学とフランス語はどのレベルのバカロレアにも必修化されている)。

4) 中等・高等教育の大衆化とバカロレア準備教育

フランスの初等・中等教育カリキュラムは、すべてこのバカロレア取得を最終目標として発達段階的に綿密に編成されている。初等教育では文法・綴り字の訓練を通して正しい文章を書くこと、中学校では4年をかけて自己の体験を離れて抽象的かつ論理的にものを述べる訓練、そしてフランスの教育の最良の部分といわれるバカロレア準備級(高校2～3年)では、弁証法で書く・語る徹底的な訓練が科目ごとに行われている。かつては一握りの優秀な生徒が「感覚的」に学んだ弁証法の構造は、ワークシートや練習問題、討論などから具体化、視覚化して丁寧に教えられていることが調査から明らかになった。哲学についても同様で、問いを変えながら抽象的概念の様々な側面に光りをあてる高度な授業が行われつつも、教師が最後に論点をまとめる試験対策的な教授法が取られていた。さらに、バカロレアの種類や、学校のレベルに合わせ、様々なレベルの教科書が出版されている。教科書におけるレベルの違い(差)は、哲学とフランス語において特に顕著である。専攻の違い(文学専攻かそれ以外か)もあるが、レベルが下がるほど、哲学の教科書は解説的になるのに対して、高度な教科書は古典や著名な作家の原文の大量の抜粋のみになる。この背景には高等教育の大衆化とバカロレア取得率を数値目標として挙げる教育政策があるが、バカロレアの種類を増やすことにより、バカロレア準備教育自体の質は落とされてはおらず、バカロレアを通して中等教育のプログラム全体が高等教育の基礎を作る構造になっている。

4) フランスの入試形式を使って日本の知識を試験する可能性-国際オプションバカロレア(OIB)

2011年の調査では、リヨンのリセにてバカロレア準備のための哲学、地理、フランス語の授業観察および教師へのインタビューを行うとともに、パリとリヨンのリセにて国際オプションバカロレア口述試験の視学官を務めることを通して、フランス式口述試験の形式を使って日本の知識(文学と地理歴史)を問う可能性を探る機会を得た。オプションバカロレアは、国語と地理歴史というナショナル・カリキュラムの根幹を、日本の教科書を使っ

て日本語で行い、それ以外の教科はフランスのバカロレアに準ずるものである(以下の総括にて日本の入試への可能性を論じる)。また、本科研費研究の3年間の蓄積を生かして、リヨンのリセで、バカロレア試験を通していかなるフランスの思考表現法と能力観が養われているのかについての講演会と研究会を行い、バカロレアの理念の共有とプログラム作りへの貢献ができたのも大きな収穫であった。

総括と日本への示唆

バカロレアの準備教育を通して養われるのは、知識を伝統的な弁証法の形式に落とし込むことによって、考え方の「型」を修得させるとともに、個別具体的な情報をまとめあげて結論や知見に導く、つまり説得力ある大きな構図を描く方法の体得である。この方法論は、哲学や歴史、文学などの確実な引用無しには適用不可能であるので、共通財産としての基礎知識の暗記とともにそれら知識を自在に組み合わせて論を展開する能力と、特に哲学においては「何を論点とするのか」を「問い」の形にして浮かび上がらせる発問力が徹底的に訓練される。バカロレアが大人への通過儀礼であると同時に「フランス人」になるための儀礼であるのは、ギリシャ・ローマに連なる思考法を中等教育を受けるすべての生徒にたたき込むことによって自らが西洋文明の継承者である誇りを植え付けることにある。同時に世界の複雑性を受け入れ、矛盾を包括しつつ動的に考える思考法は「共和国の市民」になるため初等教育から積み上げられた市民教育の知識と技術の統合として哲学のバカロレア試験に結実している。

しかしながらオプションバカロレアの試験を通しての知見は、バカロレアの「形式」の普遍性と他の地域・文化への適用可能性である。基礎的知識の暗記はあくまで引用や背景説明のための「前提」であり、その先の「分析」と「知見の引き出し方」さらに「全体をまとめあげる能力」の一連のプロセスがこなせるかどうか、また現代史や地理では資料を使って一貫性のある「ストーリー」が作れるかどうかの評価の対象になっていることであった。これらはまさに高等教育で求められている能力であり、またグローバル化、ポスト近代といわれる時代に求められる能力である。つまり、知識の「量」ではなく、能力の「質」を高める教育が、弁証法の「型」を学ぶ受験の準備教育を通して行われるのである。バカロレアの「形式」を適用するだけで、試験の重点とそのため準備勉強の質は大きく異なる。バカロレアの形式をそのまま日本の入試に持ち込むことは難しいが、まずはオプションバカロレア取得生を日本の大学に積極的に受け入れることから始めることを提案し

たい。オプションバカロレア取得生は、フランスで育った日本人、あるいは日本人とフランス人を父母に持つ学生が大半であるが、彼らはバカロレアの準備教育を通して確実に日本とは異質な思考様式を身につけている。その積極的な受け入れこそが、高等教育の国際化につながると思われる。さらに、フランスにおける初等から高等教育を横断し、発展的に「書く」様式を変化させていくカリキュラムは、初等教育の子どもの作文に替わる「型」を中等教育で意識的に教えない日本の国語教育にとって大きな示唆となる。日本でも伝統的な「起承転結」から始め、意見文、米国式エッセイ、弁証法と段階的に異なる様式を教え、その論の進み方を比較検討することにより、複数の思考法から書く目的に即して選択が可能になる。

さらに、日本にとって大きな示唆となるのは、バカロレア準備教育と実際の試験を通して行われる教育の「質保証」である。受験圧力が減り、校長裁量によって高校卒業が非常に容易になっている日本の現状では後期中等教育の崩壊が深刻な問題になっている。高大接続の問題もまさにここから発していると思われる。中等教育の「修了試験」として大学入試を再考することは、入試の方法と内容の変革を可能にする。その際にモデルになるのは、アメリカではなくフランスに代表されるヨーロッパ式の大論述問題ではなからうか。その可能性と方向性は、国際オプションバカロレアとその準備教育によって具体的に示されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

1. 渡邊雅子, 2010, 「はたして読解力なのか一日・米・仏の作文教育比較からの提言」『指導と評価』55 巻, pp. 46-49. (査読無し)
2. Masako Ema Watanabe, "Casting the Past to Forecast the Future: Styles of Reasoning in Historical Narratives in American, Japanese, and French Schools." *American Journal of Sociology*. (査読付き国際雑誌 As of May 25, 2011 2nd round review in process.)

[学会発表] (計 6 件)

1. 渡邊雅子, 2010, 「未来予測と意志決定の3つのモデル」日本社会学会第83回大会, 名古屋大学(2010年11月7日).
2. 渡邊雅子, 2010, 「日・米・仏の歴史教育に見る思考法と能力観」歴史教育者協議会第62回全国大会, 南山高校

(2010年8月1日).

3. 渡邊雅子, 2010, 「大学入試に見る知識の型と能力観」日本教育社会学会第62回大会, 関西大学(2010年9月18日).
4. 渡邊雅子, 2009, 「通過儀礼としての大学入試—バカロレアに見る社会化・能力観・思考表現法」日本教育社会学会第61回大会, 早稲田大学(2009年9月12日).
5. Masako Ema Watanabe, 2009, "Styles of Reasoning and Framing Temporality," 104th American Sociological Association, Annual Meeting, Hilton, San Francisco (Aug. 9, 2009). (査読付き国際学会)
6. 渡邊雅子, 2008, 「日・米・仏の思考表現スタイルと学校文化」東海教育社会学会, 名古屋大学(2008年11月29日).

[図書] (計 2 件)

1. 渡邊雅子, 2010, 「文化としての学習-システムとして働く文化」『現代教育社会学』岩井八郎・近藤博之編, 有斐閣, pp. 135-151.
2. 渡邊雅子, 2010, 「思考表現スタイルから日本の作文教育を読み解く」『国語科教育学はどうあるべきか』望月善次編 明治図書, pp. 107-109.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊 雅子 (WATANABE MASAKO)

名古屋大学・教育発達科学研究科・准教授
研究者番号：20312209

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし